第十一章　女房言葉

國語史上、「女房言葉」又は「女中言葉」と言はれるものには、特定の意味がある。單に、婦人用語といふ漠然たるものではない。それは一名「御所詞」とも呼ばれる樣に、實に、內裏仙洞から始まッたものである。應永二十七年の奧書ある「海人藻芥」（惠命院權僧正宣守著）に、

內裏仙洞ニハ。一切ノ食物ニ異名ヲ付テ被ㇾ召事也。一向不ニ存知一者。當坐ニ迷惑スベキ者哉。飯ヲ供御。酒ハ九獻。餅ハカチン。味噌ヲハムシ。鹽ハシロモノ。豆腐ハカベ。索麵ハホソモノ。松茸ハマツ。鯉ハコモジ。鮒ハフモジ。鵝ハツモジ。但ツグミヲ供御ニハ不ㇾ備也ツク〳〵シハツク。蕨ハワラ。蕈ハウツホ。如ㇾ此異名ヲ被ㇾ付。近比ハ將軍家ニモ。女房達異名ヲ申スト云々。御茶ヲバヲメグリト云。常ニヲマハリト云ハワロシ。相原ヲバスイ。引合ヲバヒキト申也。

これによれば、最初は食物に限られて居た事が判る。足利義政時代の將軍家の女房について記したと思はれる「大上臈御名之事」の女房詞も、大部分は食物に關するものである。然るに、元祿五年の、「女重寶記」になると、「きるい・しよくもつ・あを物・ぎよるい・諸どうぐ」と分類し、かつ、「右は御所方のことばづかひなれども地下にも用ゆる事多し」と述べてある。卽ち、食物の異名に始まッた女房詞は着物や諸道具に及び、內裏・仙洞に生れた御所詞は、將軍家から地下まで弘まッた事が判る。室町時代には百語位しか無かッた女房詞が、正德・享保の頃になると五百語位に殖えた。その內容は、やはり食物に關するものが一番多く、器具や衣服が之に次ぎ、動詞や形容詞はごく少ない。文法關係のものは皆無である。さて、食物は婦人の掌る所であるから、婦人の言葉は、知らず〳〵の內に、男

の言葉となる機會が多い。

波の花（鹽）おひや（水）おでん（田樂）おつけ（汁）おかず（副食物）おかちん（餅）おかゞみ（供餅）おみき（神酒）きんつば（燒餅）おこわ（赤飯）むすび（燒飯）おはぎ（ぼた餅）おちや（雜炊）きなこ（豆粉）なす（茄子）絹かつぎ（里芋）おかうかう（香の物）ごまめ（田作）ありのみ（梨）

我々が平生使ッてゐる是等の言葉が女房詞であると聞いて驚かぬ人はあるまい。食物の名稱を研究しようとする者は、先づそれが女房詞でないかどうかを調べてみる事が必要である。食物を除けば、女房詞の今日に傳はッて居るものは少ない。オヒロイ（歩く事）オナカ（腹）オツムリ（頭）イワタ帶（懷妊帶）ユモジ（湯具）オグシ（髮）オハチ（飯鉢）オアシ（錢）オイシイ（うまい）カモジ（かつら）スモジ（鮪）位のものである。空腹をヒモジイといふのも、ヒダルイを「ヒ文字」とした女房詞から來たのである（日葡辭書補遺）

女房詞の資料としては、「海人藻芥」「大上臈御名之事」「女重寶記」の外に

くさむすび（田安宗武）「玉函叢說」

女中言葉（正德二年寫本）「方言」四の八

女中詞（享保頃か、鶴田氏藏本）「方言」四の十一

女言葉（享保七年、伊藤幸氏寫）「國語研究」二の十二

日葡辭書（慶長八年）同補遺（九年）「方言」三の九

等がある。

女房詞の創作は既に止まッたが、使用は今日まで及び、殊に地方に殘存するものまで加へると、かなりの數に上る。左に、方言中の女房詞を指摘してみよう。但し、今日では是等は男も使ふと知るべし。

ゴンコ（飯）

常陸稻敷方言。「海人藻芥」「くさむすび」に供御、「女中言葉」「女言葉」「女中詞」に「くこ」とある。何れも飯の意である。後の三者には、書飯をヒルクコともある。然るに、「書言字考」には「小供御　女兒呼二日中食一云一爾」とある。「物類稱呼」にも、晝食の畿內方言オゴヾがある。「双は氷の朔日」に「あれみなおこゞの時分ぢや」とあり、「長町女腹切」に、「釋迦樣の開帳の相伴やらおこどやら、旅籠屋で支度して」とある。長崎版日葡辭書にはグゴとあり、「物類稱呼」に飯の條に「東國にて、ごゞ共いふ（これは供御なるべし。いせ流の女詞にも「ぐご」といふ）」とある。

ヨ　ゴ　シ（あへ物）

龜田本「女中詞」に「およこし　和物」とあり、伊藤本「女言葉」に「あへ物のこと　およごし」とあり、東大本・狩野本「女中言葉」に「よこし　あへ物の事」とある。今、加賀・筑前・佐賀・長崎でオヨゴシ、磐城・相模・佐渡・肥後・薩摩でヨゴシといふ。「丹波通辭」に「よこし」とある。「龍耳草紙」に「侍などの詞に聞きにくきは……あへものをよごし」とある。貞享の頃すでに、女房詞が侍の用語の中に侵入して居た事が判る。

オ　マ　ハ　リ（飯のさい）

高松市・長崎市でオマワリ、沖繩の上流語でオマワイといふ。「海人藻芥」に「御菜ヲバ、ヲメグリト云。當ニヲマハリト云ハワロシ」とあるけれども、「女中言葉」に「をまわり　さいの事」とあり、龜田本「女中詞」にも「お廻り　さいの事」とあり、伊藤本「女言葉」にも「さいのこと　おまはり」とあり、長崎版日葡辭書にマワリ、ヲマワリ、ヲンマワリがある。「太神宮年中行事」には御廻（オンマハリ）八種とある。

オ　ヤ　キ（燒飯）

津輕・盛岡・長野・甲斐にある。津輕のは餅米で作り、油で燒いた餅、甲斐のは玉蜀黍の粉で作ッた燒餅である。「女言葉」「女中詞」に「おやき」、「女中言葉」に「をやき」とある。意味は何れも燒餅とある。

ウ　キ　フ（すゝり團子）

伊藤本「女言葉」に「すゝりだんごのこと　うきふ」とある（他の二書も同じ）。山本格安の「尾張方言」（寛延）に「うきふ　米粉の團子を小さくつくり、赤小豆にて煮るをいふ」とある。盛岡のウキフも同樣であるが、その團子に、指先で凹みを附けるのは妙である。

ム　シ（味噌）

岐阜・福井・近畿全部・岡山・四國全部にムシ、又はオムシがある。和歌山縣のは女の詞と斷ッてある。「海人藻芥」「くさむすび」「日葡辭書補遺」「女中言葉」「女中詞」「女言葉」「浮世風呂」等にある。文化頃は江戸の女も使ッた。

オ　シ　タ　ジ（醬油）

狩野本「女中言葉」にある。近江八幡町の女の詞に今も使はれて居る。盛岡でも聞く事がある。

● イシ〳〵（團子）

イシ（伊勢）イシ〳〵（播磨）イシシ（美濃）等といふ。尾張では、平めに丸い團子をイシ〳〵と

言ツた(物類)。イシはオイシイのイシであらう。卽ち、イシ〳〵は、幼な詞のウマ〳〵と同じである。

ヨナガ（夜食）

「書言字考」に夜餉とあり、「浮世風呂」に「お夜食」とある。伊勢本「女言葉」に「一、夜しよくのこと　およなる　ゆふなる」とあるのは、オヨナカ、ユフナカの誤である。龜田本「女中詞」に「一およなか　夜食」とあり、東大本「女中言葉」に、「およなか　夜食の事」とあるのは正しい。「濱荻」に江戸のヨナガと、仙臺のユウナガとを相對してゐる。今、オユナガ（岩手）オヨナガ（加賀）ヨウナガ（早斐・靜岡）ヨナガ（岩手・越中・加賀）ヨナカリ（廣島）ヨナガリ（島原・日向）ヨナガレ（豐後・日向・種子ケ島）等といふ。夕飯後、寢る前に執る食事をいふのが一般である。たゞ、加賀のヨナガ、オヨナガだけは夕飯と報告されて居る。

シラヂ（摺鉢）

「女中言葉」に「しらぢ」とあり、「女言葉」に「しらち」とある。「物類稱呼」に東國の女言としてシラヂがある。今、常陸・埼玉・長野にある。「摺り鉢」を忌んで「摺らず鉢」とした、その略訛かと思ふ。

オメグリ（摺木）

「女言葉」にオメグリ、「女中言葉」にヲメグリ、「尾張方言」(山本格安、寛延)に御所詞としてメグリがある。今、オメグリ（長野・駿河・尾張）オメグリ棒（越後）ミグリ（出雲）メグリ（越後の昔・長野・駿河・美濃・伯耆・出雲）メグリボウ（上總・越後・駿河）など〳〵言ふ。メグリコギ（出羽の昔）は、メグリとスリコギとの折衷語である。

マハシギ（摺木）

狩野本「女中言葉」に「まわしぎ」がある。「物類稱呼」に、津輕のマスギ、越後のマハシギがある。「仙臺方言考」にマワシキとある。今、津輕で、マシゲ、マスゲ、マスギリ等といひ、上田市附近でマワシギといふ。

カリヤ（月水）

「女中言葉」「女中詞」「女言葉」にある。今、伊勢度會郡、信濃諏訪郡で言ふ。假屋である。

テナシ（月水）

「女言葉」にある。今、大隅種子ケ島で斯う言ふ。

サクヅ（米糠）

狩野本「女中言葉」「女言葉」にある。「書言字考」には、米糠を、サクヅともコヌカとも訓して居

る。今、岩手・宮城・福島・佐賀にある。

ク　ケ（芽）

「女中言葉」「女中詞」「女言葉」にある。今、京都市・大阪市・奈良・播磨・因幡・石見・備後・大分にある。因幡では、キノコと複合して、タケノコとも言ふ。筍と紛れる。

オヒンナル（起きる）

「片言」に、「御寢あれを　ぎようしなれ、ぎよしなれなどゝいふはいかゞ。およれぞ、おひなれぞといふは、をんなこと葉にやさしと云り。おひなれはお晝なれといふ心歟。それをおひんなれとはいかゞ」とある。「世話類聚」にもヲヒルナルを正、ヲヒンナルを訛としてある。「日葡辭書」にはヲヒルとヲヒンとを擧げ、「貴人日をさます」の女詞とし、「イザヲヒンアレ」イザヲヒンナサレイ」と用例をあげてある。「女中言葉」にオヒルナル。「女中詞」にオヒル成、「女言葉」にオヒンナルとある。今、オヒナル（盛岡・廣島・香川・徳島・大分）オヒニナル（長門）オヒリ（常陸）オヒンナリ（加賀）などゝいふ。

クモジ（壺漬）

慶長九年の「日葡辭書」補遺に、鹽漬の蕪・大根、の女詞として、クモジがある。狩野本「女中言葉」「女中詞」「女言葉」にもクモジがある。壺漬のことゝ註してある。今、オクモジ（能登・加賀・播磨・廣島・高松・阿波・筑前・佐賀・島原）オコモジ（廣島）クキ（若狭・近江・和歌山・小豆島・長崎市）クモジ（飛驒の昔・奈良市・和歌山・神戸・播磨・備前・小豆島・阿波・佐賀・長崎市）などゝいふ。「浪花聞書」に「くき　大根を葉とともに鹽漬にしたるを云。又はくもしとも云。男女ともに斯云也」とある。「浪花聞書」の著者は江戸人であるらしい。文政頃、江戸では、女ばかり、クモジと言ツてゐたので、大阪で、男がクモジといふのが變にひゞいたらう。

オカベ（豆腐）

「女中言葉」にヲカベ、「女中詞」「女言葉」にオカベ「海人藻芥」「くさむすび」「日葡辭書補遺」にカベとある。今、日向・薩摩でオカベといふ。

ソロ（素麺）

「くさむすび」にある。「女中詞」には「おひやぞろ　冷しそうめん」とあり「女言葉」に「そうめんのこと　おひやぞろ」とある。今オソロ（栃木・伊豆・豐後）ソロ（信濃・美濃・豐後）ソロ〳〵（米澤・上總・佐渡・出雲・肥後）といふのは幼な言葉である。もツとも、豐後などでは婦人語でもある。そうめん・蕎麥・うどん等の幼な言葉には、この外、オザラ（甲斐）オザンザ（信州）オゾーゾー（駿

河）オダラ（甲斐）オヂューヂュー（伊豆）オヅーヅー（相模）オヅッ（高松）オヅル（相模・伊豆）オンゾ（栃木）ザンザ（信濃）ズウズ（美濃・尾張）ズーズー（相模）ズル（備中）ズル〳〵（遠江）ズンズ（信濃）ゾーゾ（尾張・出雲）ゾゾ（飛騨）ゾベ（越中）ゾベゾベ（越中）ゾンゾ（美濃）チュルチュル（近江）ツー〳〵（大阪府）ツォロ〳〵（山形）ツル（大和）ツル〳〵（東京市・常陸・奈良市・神戸・山口市）ペロ（岩手）ペロ〳〵（秋田）等がある。何れも、食ふ時の音から來た擬聲語である。今なら、ツル〳〵といふ所だが、昔の人はゾロ〳〵と聞いたと見える。

女房詞には、幼な詞と同じ造語法のものが少なくない。イシ〳〵（團子）マル〳〵（團子）ウキ〳〵（うきふ）ツミ〳〵（つみ入）イリ〳〵（いり豆）カウ〳〵（香の物）アサ〳〵（淺漬）トト（魚）オカカ（鰹節）ササ（酒）ホリ〳〵（干瓜）カズ〳〵（數の子）スル〳〵（鰯）等。これらは幼な詞の借用であらう。トトなどは確にさうである。「運歩色葉集」に「倭國小兒呼ノ魚曰ニ斗々ニ」とある。これは易林本節用集や下學集の增補にも引かれてある。幼な詞を最も頻繁に使ふ者は、幼兒よりも、母なる婦人であるから、幼な詞は、自然、女房詞になる機會が多いわけである。

以上の女房詞を地方別に合計すると、九州二十、四國九語、中國十一、近畿十八、北陸中部二十四、關東七、東北十二となる。之を縣數で割つて、一縣當りの平均を出すと、九州二・九、北陸・中部二・七、近畿二・六、四國二・三、中國二・二、東北二、關東一の順となる。關東が一番少ないが、これはオナカ（腹）オハチ（飯鉢）等、東京市で使はれて居る言葉を省いた結果である。九州が一番多いのは意外である。三四百年前に初めて出來た京都の女房詞が、こんな遠くまで來て居る。これで見ると、九州方言はあまり古いものではないといふ印象を受ける。

なほ、女房詞は凡て京都起源のものであつて、地方に發生した女房詞といふものは存在しない。